



今宮幸浩 代議員
(久留米運輸センター)

3月の駅の営業時間の見直し・無人化で利用者から「切符が買えない」等の不満をよく耳にする。高校生は、休日に親の足を借りて有人駅まで定期券を購入しに行っているとのこと。コロナで収入が減ったとはいえ、利用客に不便を押し付けてまで人件費削減を実施するのは公共交通機関として問題である。また、乗務線区の沿線は草が伸び放題で、まるで草原の中を運転しているかのようで、いつ事故が起きてもおかしくない。今は嘱託再雇用で働いているが、賃金は大幅に減らされ、仕事内容は退職前と同じ。政府が言う同一労働・同一賃金はどうなっているのか？特休を年間12日増やしてそれでおしまい、など労働者を馬鹿にしているとしか思えない。



香田賢晋 代議員
(博多車掌区)

「情報」の重要性を強調したい。全国には、自ら国労のHPを探し出し、労働相談を持ちかけてくる方もいる。掲示物には「個人コラム」を設けるなどの工夫を行い個性を出すと、面白い記事が出来るのではないか。掲示板は単なる情報伝達にとどまらず、自己表現の場でもある。職場に掲示板のないところや、新聞を発行していなくて、「言いたいこと」がいろいろあるという方は、是非、博多地区本部まで。

青年のひとりごと

ある峠道にロバを連れた老夫婦が、ロバに乗らないで、夫婦でロバを連れていっていると、「ロバがいるのに乗らないのか？もったいない」と言われる。また、ロバに2人で乗っていると、今度は「ロバがかわいそうだ」と言われる。そこで、ご主人だけがロバに乗っていると「威張った旦那だ」と言われ、反対に奥さんだけがロバに乗っていると「あの旦那は奥さんに頭が上がらない」と言われる。これは、イソップ寓話の一つとされている有名な話で、「人は何をしても、必ず誰かに批判されるのだから、そこは割り切って、自分の考えに自信を持ちましょう」という主旨のものです。しかし、私たちにとって、「他人の目」はやはり気になるもので、自分の考えに確固たる自信を持つのはそう簡単なことではありません。というのは、特に私たち日本人は、子供の頃から、何事においても「正解」が存在することを前提とする教育を受けています。そのため、私たちの頭の中には、「正しい人間でいたい」という欲求が必ずあります。また、教育の形態として、集団における和を重んじることが最優先とされているため、自分が「正しい」のかどうかは、必然的に、他者の反応を通してしか判断できません。そのため、社会通念上、自分側に問題がなく、他人の言動に悪意や違和感を覚えたような場合であっても、「私も悪いのかな？」と自己批判に陥り、精神的に病むといったことは十分に起こり得るわけです。しかし、こうした教育的欠陥は、少し視点を変えれば、割と簡単に克服できます。それは、ものごとを「好き」「嫌い」で判断することです。私たちは、「正しさ」に固執するあまり、この判断基準を蔑にしています。そもそも「正しさ」とは絶対的なものではありません。どうしても「正しい人間」としてのプライドを捨てきれないのであれば、自分の「正義」に沿って、結論に「好き」か「嫌い」か、を持ってあげればいい。個人の「好き」「嫌い」の問題なら、他者から何と言われようが特段気になることはなく、上記の寓話にリアリティが出てきます。そう長くはない人生、積極的に赤の他人から振り回されていても仕方がないと思います。

○当面する行動

○9月8日(木) 13:30~/運転協議会幹事会 サンメッセ鳥栖

○9月21日(水) 15:30~/平和・人権・環境県フォーラム役員会 県フォーラム事務所